



令和5年12月1日
第52号

発行 梅花流師範・詠範の会
会長 本間 雅 憲
題字 初代会長・故 加藤信三師
編集者 (広報部) 近藤 俊彦
印刷所 (資) 由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局
倫勝寺 (能代市) 山田 卓爾
TEL 0185-58-2302

「川又歌子さんが育てた休耕田の蓮 (8月中旬頃・鹿角市花輪)」



秋田県梅花流師範・詠範の会副会長
松山郁子

梅花の力に押されて

ふるさとの山河はただそこにそびえ、そこを流れているだけで多くの恵みをもたらすばかりでなく、懐に抱かれているような心の安らぎと弱い自分を奮い立たせる勇気をも与えてくれるありがたいものです。

しかし、今年七月の記録的大雨では県内の小中の河川が氾濫して、命や生活、財産を脅かし、秋田県では過去に例がない程の甚大な被害が出ました。

降り続く雨による川の氾濫や内水氾濫、土砂崩れ、冠水した農地や道路、浸水した住宅の様子 テレビで放映されるたびに、私は東日本大震災を思い出し、自然のもつもう一つの力に畏怖の念を新たにしました。

日にちが経つごとに被害状況が明らかに なっていきましたが、一方で悲嘆に暮れながらも懸命に立ち上がろうとする人々や、精魂込めて復旧作業に当たる多くの災害ボランティアの姿がありました。災害に負けまいとする逞しさと同じ思いをもつて行動する優しさ

に深く心が揺り動かされ、『道心利行御和讃』の二番の歌詞が脳裏をよぎりました。
山河自然の厳しさと 愚心に而今を生かされて
利他の功德を積む人の 花の笑顔ぞ美しく
あなたと共に伝えあう 正しき法の灯火を

この歌詞に強く背中を押され、自分のできることはないかと模索せざるを得ませんでした。電話で知人と安否や被害状況を確認し合ったり、近所を廻りその時抱いた恐怖感や不安感を共有し合ったり、床上浸水した地元の小学校に支援物資(タオル)を届けたり…。近くのお寺では、命の危機に迫られ避難して来た方々を親身になって世話をし、安心と安全の確保に精一杯努めたということです。傷みや苦しみを共に分かち合うことで、こんな時でも、いいえむしろこんな時だからこそ互いの心に光明が差し込んでくるような気がしました。

自然災害だけでなく、感染症、かつて無かったような凶暴事件や予測不可能な事故、悲惨な戦争等々。生きていく限り続く心配や不安、苦しみや悲しみを仏教ではよく泥沼に例えます。どんな時も泥中からまっすぐ立ち上がり、美しい花を咲かせる蓮のように、清らかに凛として生きていきたいものです。

穏やかに晴れた日のふるさとの山河は、やはり包容力に溢れ、生きる力を与えてくれます。被災された皆様の平穏な日常が一日も早く戻りますことを心よりお祈り申し上げます。

新任特派巡回報告

令和五年四月、曹洞宗宗務庁より県内歴代十五人目の特派師範として柳川一童師範が任命されました。この度、記念すべき初の特派巡回を終えてご本人よりフレッシュユでユーモア溢れる感想をご寄稿いただきました。ごついでにご覧ください！



能代市常盤・玉鳳院住職

柳川一童

報恩感謝の心を忘れずに

「特派やってみたい？」

「呼んでいただけるのであれば…」

「やりたいって言いなさい！」

「やりたいです！」

昨年秋、とある先生と私の会話の一端です。それから半年後…。なんとこのことでしょうか！誠に僣越ながら、今年四月より県内梅花流特派師範を拝命いたしました。

多くの特派師範を輩出してきた当秋田県において、「まさか自分が？」という驚きと、「自分でよいのか？」「自分にできるのか？」という不安が過りましたが、生来の楽天家である私は「まっ、なんとかなっぺ！」と思っただけでした。

しかしながら、柴田弘一先生をはじめ、普段ご指導頂いている師範の先生方、特派巡回で秋田にお出でになる先生方の講習を思い起こすと、「今の自分ではなんとかならない…。もっともっと研鑽しなければ！」と、自身の不勉強を猛省しつつ稽古に励みました。

そして迎えた初めての巡回。六月に山形県第三宗務所様、九月には北海道第一宗務所様にお邪魔しました。四年振りの特派講習会ということもあり、どの会場も檀信徒講員様の期待に満ちた表情、元気な歌声に溢れていました。また、行く先々で心温まるおもてなしを頂戴し、緊張と若干のホームシックも何処へやら。講習の度に元気を頂き、初めての巡回を終えることができました。

さて、沢山のおもてなしを頂戴した今回の巡回ですが、中でも一番心に残ったことがあります。北海道江差の大円寺様にお邪魔した際のお座敷に通していただくと、地元のお菓子と抹茶をご馳走になりました。抹茶は大円寺御寺族様のお点前で「宗徧流」とのことでした。ほんの一瞬のために、茶器を選び、お湯を沸かし、到着を見計らい、茶を点てる。なんとも有難いおもてなしに感動した次第でした。その場その時一度きりのお唱えのために、何度も曲を練習し、所作を確認する梅花流。茶道と相通ずるものがあるように思います。一口頂くと、ふっと『報謝御和讃』の歌詞が思い出されたのでした。

一河の流れ掬むにさえ 深き恵と知るものを
真心こもる熱き茶に 疲れを癒す有難さ

檀信徒講員様は指導者の鑑。指導者のすべてをそっくりそのまま映してください。ならば特派師範は…。自問自答の毎日ですが、ご指導してください先生方、一緒にお稽古してください先生方。檀信徒講員様方への報恩感謝の念を忘れず日々精進して参ります。皆さま、これからもどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



特派巡回講習の様子

梅花流全国奉詠大会報告

令和五年五月二十四日、「東京ガーデンスシアター」(東京都江東区有明)にて、令和五年度梅花流全国奉詠大会が開催されました。コロナ禍もひとまず落ち着き、全国から約三千六百人の梅花講員さんが集まり、四年ぶりの登壇奉詠を行いました。この度、秋田県からは二十七名の講員さんが参加され、内お二人に大会の感想をご寄稿いただきました。

初めての梅花流 全国奉詠大会に参加して



北秋田市・
太平寺梅花講員
今泉正子

私は梅花を始めてまだ二年目。コロナ禍で開催中止になっていた大会が四年ぶりに開催されるとの事で、大会がどのように行われているのかも分からないまま今回参加させていただきました。

会場に入って、こんなにも梅花流詠歌に触れている方がいるんだなとびっくりしました。でも、太平寺梅花講から一緒に来た先輩曰く「いやいや、以前はこんな規模ではないよ。コロナ前と比べると半分だよ」と教えてくださり、改めて全国規模の大会に圧倒されました。先輩はハーサルなどなしに東

北ブロックの方たちと登壇奉詠され、秋田県代表の方々は皆とても素晴らしいお唱えでした。

梅花流を始めたいと思ったのは、義母が旧合川町鎌沢の生まれで、嫁ぎ先も同じ菩提寺で熱心に行っていた事と、コロナが流行る前に太平寺様の涅槃会に参加した際、そこで聴いたお唱えが素晴らしい事がきっかけです。私も梅花流を始めようかなと義母に話し、法具があつたら借りようかなと考えていました。しかし、今思えば梅花流に階級がある事など知らずに言っていました。ある時、正法院様(北秋田市鎌沢)で法要があり、供養が終わった後、義母が住職様に何か話しているなと思っておりました。そうしたら、新たに法具一式を注文してくれていたのです。とても有り難い思いでした。「もう、やるしかない!」と思い、太平寺様へ月二回(第二と第四日曜日の午後)通わせていただきご指導を受けております。

梅花流全国奉詠大会に 参加して

大館市・源守院梅花講員
菅原牧子

御詠歌を初めて十余年。おしゃべりに花が咲き、法具を解かずに終わる事もしばしば(笑)。

今回の課題曲『永光』は一度も聞いた事がなかったもので、仲間の皆に付き合ってもらい、今までにない程時間をかけて練習したのですが、七割程の仕上げのまま当日になってしまいました。練習を通して

私達の絆も深まったように思います。仲間励まされかけました。

不安なまま、引き受けた事を少し後悔しながらの登壇となり、合掌で待っていると、「ガツ」(お唱え開始の鐘の音)と合図があり、詠題司さんの一声、詠頭司さんのお唱えに、一緒にお唱えすれば大丈夫という妙な自信が湧いてきて、終えた後は満足した自分がいました。一緒にお唱えした東北地区の皆さん「ありがとう」という気持ちでいっぱいになりました。

これからも仲間と協力し、仲良く続けていきたいと思えました。

合掌



大会参加者の皆さんと



登壇奉詠の様子②



登壇奉詠の様子①



登壇奉詠の様子③

梅花のふるさと

詠讚歌の生まれた風景 へその三十 達磨大師御詠歌・廓然

花開いて世界起こる (一)

達磨大師御詠歌 (廓然)

伝えましようけつぎ来たたり有難や

五葉に開く道のひとすじ

作詞 赤松月船

達磨大師の詠讚歌は「達磨大師御和讃」と「達磨大師御詠歌」の二つです。「達磨大師御和讃」は達磨大師一代の物語を順に語り継いでゆく内容になっています。「達磨大師御詠歌」は伝記ではなく、達磨大師が示された「一華五葉に開く」という言葉をもとにしています。この言葉は達磨大師その人の教えを表すものであるとともに、梅花流の根本的な教えに関わるものでもあります。このたびは二回に分けてこのことを取り上げてみましょう。

◇ 「花」に託した伝法偈の世界 ◇

「一華五葉に開く」とは、達磨大師が弟子の慧可に示した伝法偈の一句でした。伝法偈とは、師から弟子へ法を伝える時に与える偈文(漢詩)の

ことです。それは次のようなものでした。

われ本、この土に来たる。
法を伝えて、迷情を救わんとなり。
一華、五葉に開き。結果、自然に成ず。

達磨大師は南インド香至国の王子として生まれましたが、出家し、中国へやってきました。その目的は、仏法を伝え、人々を迷いの世界から救うためであるということです。「一華五葉に開き。結果自然に成ず」とは、字義通りに言えば、一つの華は五葉に開き、その結果は自然に成就する、というものです。

この偈は、達磨大師の師、般若多羅尊者の伝法偈をふまえているものです。

父である国王が亡くなった時、出家を求めた達磨大師に向かい、般若多羅尊者は告げました。「釈迦はその正しい教えを迦葉尊者に伝えられた。そしてそれは代々伝わり私に至った。私は今この教えをあなたに伝えよう。さあ、私の言葉を聞きなさい」と。そして言われたのが次の言葉でした。

心地諸種を生ず。事に因って復た理を生ず。
果満ちて菩提円かに、華開いて世界起こる。

心からあらゆることだけが生まれる。そのことどもから道理が生まれる。その実りが満ればさとりは円満なものとなる。これが花開いて世界起こるということだ。達磨大師はこの偈を受けて中国へ旅立つのです。

達磨大師の偈が般若多羅のそれを受けていることがわかるでしょう。二人の偈を見ていると、土種、華、果など、植物が種から生じて花開き果実を結ぶというイメージが共通しているようです。

じつは達磨大師の後、二祖慧可、三祖僧璨、四祖道信、五祖弘忍、六祖慧能と禅宗歴代の祖師が続くのですが、それぞれの伝法偈にこのイメージが流れているのです。このうち六祖はこの人を契機に五家七宗と言われる中国禅宗諸派が生まれた、事実上の禅宗開祖とも言うべき人です。慧能の伝法偈を挙げてみましょう。

心地諸種を含む普く雨らしに悉く皆な生ず。
頓に華情を悟り己われば、
菩提の果自ずから成ず。

ここに言う「華情」とは一見、情緒的な表現ですが、般若多羅や達磨大師の偈を踏まえてみると、けっして花鳥風月を詠ずるような「花の情」では

ないと考えられます（この偈は、日本の能の大成者・世阿弥が『風姿花伝』に引用していることで有名ですが、ここでは無関係です）。伝法偈とは師が、自身の仏法の最も重要なところを言葉にして弟子に伝えるものですから、たんに季節の情景を詠嘆的によむようなものではないのです。般若多羅が「花開いて世界起こる」と言い、達磨大師が「一華五葉に開く」と言うときは、それはさとの世界が展開する、仏法が花開くという意味と理解すべきものです。その仏法のあらわれ、展開するありさまを、慧能は「華情」と言ったのでしよう。華情すなわち仏法のおきらかになる道理をはつきりと体得することが出来るなら、さとの成就は自ずからまっとうできるだろう、これが慧能の伝法偈の意味合いでしょう。

このように考える時、般若多羅尊者以来、「華開いて世界起こる」というさとの世界の姿を、歴代の祖師はそれぞれの言葉で伝えてきたと言いうことになりす。

◇ 赤松月船師の作詠 ◇

それでは「達磨大師御詠歌」の作詞者・赤松師はこの御詠歌を作る時どのような考えに基づいていたのでしょうか。まず同師は、御詠歌のもとになった達磨大師の伝法偈について次のように解説しています。（以下、赤松師の解説文は『梅花流指導必携』昭和五四年発行。改訂第一版による）

一華は正法のことでありす。中国にはるばる来て、正法の真実を伝えたぞよ、とこう達磨大師がおっしゃる。その正法は、慧可大師が承けつぎ、慧可大師は僧璨禪師に、僧璨禪師は道信禪師に、道信禪師は弘仁禪師に、弘仁禪師は慧能禪師に、つぎつぎにお伝えになりました。この慧能禪師に至るまでのお祖師様方が、どのように辛苦をせられたかは、長きにわたりますので、ここでは申し上げません。

慧能禪師の時に至って、達磨大師の思召おもほせが漸く中国全土に行きわたり、時節を迎えて、花がはあつと開くように、正法の春が来たのであります。

一華は、達磨大師が、正法をお伝えになったことを、結果は、華が咲いて実を結ぶこと、即ち大法が栄え、大法が盛んになったことをあらわし「成ず」とあるのは、実現成就の意味であります。五葉は正法の家門が五つに分かれて繁盛したことでありますが、五つに枝葉がひろがった仔細は、今は一々申し上げません、枝葉が広がり茂るその様に、正法が栄えたことであります。

とあります。ここに引いたのは解説文の一部ですが、解説文の中に般若多羅の伝法偈は触れられていません。しかし前節に述べたような達磨大師の偈が、後の祖師に代々伝えられたことを赤松師が踏まえているのはこの文章からあきらかです。つまり「一華五葉に開く」とは達磨大師単独のものではなく、歴代祖師に引き継がれてきたものだという事です。

このように見てくると、「一華五葉に開く」とは歴代祖師をつらぬく仏法のことと考えなくてはなさそうです。そして実はその考えは道元禪師が言われていることであり、達磨大師の偈ばかりでなく、「花開いて世界起こる」ということわりが、仏法そのものであると示しているのが『正法眼蔵 梅花』巻なのです。（次号につづく）



龍源寺四百年記念法会

令和五年六月三〜四日、由利本荘市矢島町の龍源寺様に於いて「開山四百年記念法要」が厳かに修行されました。今回は特別に龍源寺と梅花流のご縁について、土屋泰順師よりご寄稿いただきました。

※今年、由利本荘市では元和九（一六二二）年に入部した領主「岩城・六郷・打越」の三氏入部四百年にあたり、歴史講演会など様々な行事が催されています（入部とは領主などが初めて自分の領地に入ること）

四百年の伝統と歴史を詠い継ぐ

由利本荘市矢島町・龍源寺住職 土屋泰順

当山龍源寺は、今年で開山四百年を迎えました。その中で、梅花講の歴史は三十二年になります。龍源寺梅花講は、かつてお涅槃などの法要をお手伝いさせていただいた地元の女性方による「金嶺講」が発展する形で始まりました。私はまだ小学生の頃ですが、ある日突然お寺の中で梅花のお唱えが響き、何が始まったのだろうと思つたことを覚えております。そんなかつては何も知らなかつた私が、四百年を迎える今この時に住職を務めている。この事は、間違いない僧侶としての自分の大事なのだと思ひました。そこから始まつたのが、去る六月に行つた「開山四百年記念法会」です。

奇しくも先代の三回忌も重なり、様々な思いの中で祝祷法要の準備を進めました。その中で力を入れたのが「龍源寺の和讃を作る」ということです。これは先代住職とも話をしていたことでした。龍源寺をあらわす、龍源寺の梅花講の皆様がお唱えするものを作りたい。しかし、同時にこれから「詠い継がれていく」ものでなくてはならない。自分勝手



導師をつとめる土屋泰順御住職

にならぬよう、歴史を知り、教えを確かめ、龍源寺への思いがある方にも領いていただけようなものを作らなくてはならない。初代講師をお勤めいただいていた西目の圓通寺東堂老師や、現講師である圓通寺方丈様。縁ある多くの方にアドバイスをいただきながら少しずつ和讃作りを進めました。

私は龍源寺の梅花講を支える一方で、詠讃歌の心得はありません。しかし、道元禅師や瑩山禅師、諸山の祖師方は自身が信じるものを自身の言葉で歌とし、それが詠讃歌となってきたことは知っております。その流れが私たちの行持の中に息づいていることも知っております。この和讃作りは、何が大事で、何を違えてはいけないのかに向き合う大切な機会となりました。その上で、今の自分の全てを出し切り、作り上げることができたと思ひます。

四百年の中の三十年は短いかも知れませんが、しかし、間違いなく龍源寺四百年の伝統と歴史です。これを更に生かし続けていく。生かすために新しい一歩を。この和讃作りがその一歩目になつてくれればと願つております。

『金嶺山龍源寺御和讃』 ※「同行御和讃」の替節

- (一) 茅の虚空位処とし のぼる打越の一匹龍
四百年の歴史を守り継ぐ 仏の天蓋となりたもう
- (二) 龍の眼にいだかれて 回る生駒の半車
人に大慈の道ひらく 法の轍となりたもう
- (三) 鳥海の山の光射す 祈りの僧伽龍源寺
永久に大悲の香りある 華の台となりたもう



龍源寺梅花講30周年を記念して植樹された梅の木の前にて



厳かな法要の中で奉詠される梅花の調べ

梅花と共に

松山さんには、冒頭表紙では、師範・詠範の会副会長として大雨災害へ心を寄せる挨拶文を頂戴しました。ここでは、梅花との出会いについて改めて貴重なご寄稿をいただきました。お忙しい中での原稿執筆に心より感謝、御礼申し上げます。

梅花流詠讃歌に出会って

秋田市太平・林清寺寺族 松山郁子

梅花流詠讃歌に出会う尊いご縁をいただいたきっかけはそれぞれだと思いますが、私の場合は祖父が亡くなった小学生の時でした。小練忌まで毎晩親戚縁者が集まり、念仏を唱え丁寧（まじまじ）に供養していました。そして、その後には必ず『三宝御和讃』もお唱えしました。小学生の私にはその意味は解らないもの、美しく覚えやすい旋律に誘われ声を合わせていました。唱え終った時には、ふうつと祖父の笑顔が目に見え、不思議なくらい穏やかな気持ちになれたことを今でも覚えています。梅花流がまだ今のようにならなかつた頃のことです。

それから何十年も経ち、梅花流を本格的に学び始め、『三宝御和讃』の意味を改めて噛み締めました。自分の思惑に囚われたり、そこから生ずる迷いや不安に翻弄されたりしている我が人生を顧みる時、『仏

法僧』という三つの宝を拠り所として、共に今をより良く生きることの大切さをしみじみ感じます。

梅花流の数々の曲を学んでいく過程でも、私は、それぞれに刻み込まれている歌詞を通してたくさんのことを学びました。一仏両祖の尊いみ教えやご生涯、み教えを実践していくことの大切さ、菩薩様方の慈悲の心、様々な恩恵に感謝する報恩の心等々。

折々に亡き父母や妹を偲び、供養の気持ちを届けたいと追善の詠讃歌を唱えていると、一緒に過ごした日々がありありと蘇り、涙が溢れてきます。私の気持ちのまま表すような歌詞と旋律、優しい鈴と鉦の音色がお互いの魂を繋いでくれているような気がしてなりません。

梅花道は進むほどに奥が深く出口は遠い先のように思いますが、正に仏道を極めていくかのような生きる喜びを感じます。同じ道を歩む仲間を支えられて今があります。互いに励まし、いたわり合って同行同修の道を歩んで参りましょう。

実家の菩提寺である

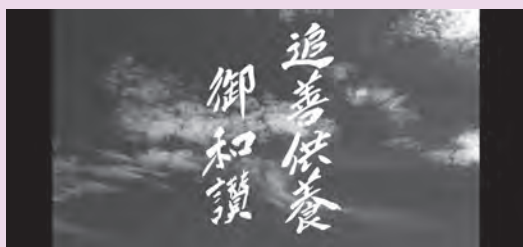
松庵寺（三種町）ご住職様のお話

昭和三十年代後半、梅花流が普及してきた頃、元々松庵寺にあった「本山講」でお講が開かれる時『三宝御和讃』を唱えるようになった。

同じ頃、お寺の近くの町内では誰かが亡くなると、念仏の後に集まった人たちがみんな『三宝御和讃』を唱えるようになった。

敬虔の念の深まりと心の安らぎが得られることで地域に浸透し、後の梅花講に繋がっていったのではないだろうか。

梅友チャンネルの新録音源がアップされました！



梅友流に表現した『追善供養御和讃』の美しいモノクロ映像の世界観。そこに静かに寄り添う4人のお唱え。冬が秋を迎えに来るこの時節、心静かに耳を傾けご堪能ください！

▶ YouTubeで検索…「梅友チャンネル」



第1教区梅花合同練習の様子

毎月一回、太寧寺（大仙市）ご住職様のご指導で楽しくお稽古をしています。梅花人口が減少している現状の中、新しい曲の習得にも真剣に取り組む数少ない男性講員さんにみんな励まされています。

曹洞宗秋田県宗務所

QRコード

スマートフォン等で読み取ると、『同行』過去号から最新号まで閲覧できます。



龍源寺梅花講 30周年記念 令和3年春 梅の木が 植樹されました



仲睦まじく咲く紅白咲き分けの梅

表紙について

今号の表紙は、鹿角市花輪字妻ノ神にある蓮畑の蓮の花です(予定より掲載時期がだいぶズレてしまい申し訳ありません)。育てているのは前号で県奉詠大会の感想を寄稿していただいた川又歌子さん(鹿角市・恩徳寺梅花講員)です。川又さんは退職を機に蓮の栽培を始め、今年で五年目になります。毎年七月下旬頃から九月頃まで、薄桃色の見事な花が地域の方々の目を癒してくれているそうです。



川又さんが蓮を育てるきっかけになったのが、花輪の恩徳寺様で習っている梅花流詠讃歌とのこと。父親の通夜法要の際、故岩館祖芳前御住職がお唱えされた『追弔御和讃』に心を動かされ、御詠歌に興味をもったそうです。

定年退職を翌年に控えた、二〇一九年の秋から恩徳寺様にて御詠歌を学ぶようになり、練習曲としてお唱えした『花供養御和讃』の一節「濁りに染まぬ蓮の花」について、祖芳前住職が「蓮は泥の中から生まれるけれど、素晴らしい花を咲かせてくれる」と内容を解説。この言葉に感銘を受けて蓮を育てる決意をされたそうです。

栽培は自宅裏の田んぼを使用。十二株、約四百平方メートルから始めた畑は、現在約倍の八百平方メートルに広がり、花も数百株を数える見事な蓮畑になりました。一昨年、畑の一面に東屋を作り、誰でも鑑賞できる環境を整えました。

ぜひ来年、お近くにお立ち寄りの際は、梅花ゆかりの蓮の花を親に行ってみては如何でしょうか?

写真・松井祐司(鹿角市花輪・長年寺副住職) 参考・米代新報(鹿角市)

テレビホン梅花

☎〇一八(ハナミ) ナムナム 七六七六

【毎週土曜日にテレホンが更新されます】

◎柴田弘一正伝師範による お唱えとなります

【令和五年】

十一月 四日 修証義(和讃) 十一日 伝心

十八日 紫雲(釈迦) 二十五日 成道(和讃)

十二月 二日 明星 九日 観音(和讃)

十六日 慈光 二十三日 浄光

三十日 浄心

【令和六年】

一月 六日 法燈(太祖)

十三日 法燈(太祖)

二十日 法燈(高祖)

二十七日 法燈(高祖)

二月 三日 涅槃(和讃)

十日 無常(和讃)

十七日 無常(和讃)

二十四日 月影

三月 二日 花供養(和讃)

九日 供華

十六日 追弔(和讃)

二十三日 追善(和讃)

三十日 報謝(和讃)

四月 六日 太祖影向(和讃)

十三日 影向第一番(伝光)

二十日 紫雲(太祖)

二十七日 御授戒(和讃)

〒010-0111 秋田市金足岩瀬字前山3 東泉寺 TEL018-873-2675

◎令和5年6月21日の太祖瑩山禪師七百回忌大遠忌「東北管区予修法要」及び11月17日の「禅を聞く会」にて披露された、梅花流詠讃歌と「音」でつづる瑩山禪師の一代記『常済の光』については次号にて特集します。

投稿・感想等々、大歓迎です!

〒018-0604 由利本荘市西目町沼田字敷森27 円通寺(近藤) TEL0184-33-3049